



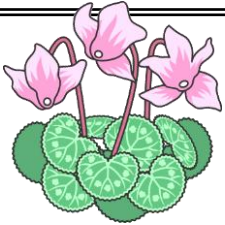
学校だより

横浜市立相武山小学校

12月号

令和4年11月30日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「好奇心」

学校長 後藤 直樹

好天に恵まれた遠足や校外学習、そして規模を縮小しながらも PTA を中心に地域の皆様、そして「親じ会」のご協力により、3年ぶりに開催できた「相武山地域フェスティバル」。コロナ禍の日々にも少しずつ平常が戻りつつあるなど感じられた秋でした。しかし寒さと共に再び増え始めている感染拡大には、もうしばらく神経を尖らせる必要があります。

さて、2カ月ほど前から校長室に、理科室から借りている顕微鏡が1台置いてあります。休み時間に訪ねてくる子どもたちに時々見せているのですが、多くは低学年の子どもたちです。私は、子どもたちが好奇心でいっぱいこの顕微鏡をのぞき込む時の表情を楽しみにしています。うまく片眼で覗けないので、反対の目を手で押さえている子もいます。初めの頃は、校長室前に置いてある熱帯魚の水槽の壁にいる植物プランクトン（イカダモなど）を見せていたのですが、子どもたちが一番歓声を上げたのは「コロナウィルス見つけたかも？」と言ってから見せた花粉です。「これは朝顔の花粉だよ」と種明かしをすると、笑いながら口をそろえて「な～んだ！」という反応が返ってきます。同じような画像であればパソコンやタブレットで検索をすれば簡単に見られるものかもしれません。しかし顕微鏡をのぞき込む瞬間のわくわく感、検索して見つけた画像からでは決して体験できないかと思えます。先日の皆既月食もそうでしたが、本物（実物）には気持ちを引きつける魅力があります。顕微鏡の取り扱いや花粉の観察は5年生の理科で扱います。特に授業の導入部分では、それまでの経験が学習内容全体への興味関心に大きく影響するものです。6年生になり、月の満ち欠けを学習するとき、先日の皆既月食を観察した子どもたちは、真っ先にその様子が頭に浮かぶに違いありません。コロナ禍の中、様々な制限により、これまで以上に子どもたちの生活の中での体験が減少しているだろうことは、容易に察することができます。年度当初の学校説明会の中でお伝えしましたが、日々の学習活動の中での他者との関わりや、体験的な活動を重視していく方針を、今年度も残すところ4カ月となりましたが、なんとか貫いていきたいと決意を新たにいたしました。

ところで、もう一つ個人的に小さな感動がありました。右の写真は顕微鏡の接眼レンズにスマートフォンのレンズを近づけて撮影したアサガオの花粉です。ひと昔前までは、顕微鏡での撮影となると、高性能の一眼レフカメラと高価な接続アダプターが必需品でした。急速な技術の進歩には今さらながら感心させられました。

